

ゆるふーVI

まなキキ・オンライン講読会

『主体の解釈学(2)』第5講

一九八二年二月二十四日①「表象と自己」他

2025年11月11日

M せんせい

■ 自己への立ち返りにおける「世界についての知」の位置づけ（セネカ）

- ・ 「自己への立ち返り→世界についての知の価値をおとしめるきっかけ」にはならない
 - ・ 「自己の立ち返り→自己の認識(内面性や内的世界の探索や解読)のきっかけ」にもならない
- ⇒ 自己への立ち返りと世界認識という二重の必要性と結びつく(=霊的な知)
- :世界の頂点まで退く主体は、世界を俯瞰する視点を持つことができる
- 自然の最も内密な秘密まで分け入らせる
 - 彼(本人)が存在している空間わずかな一点、彼(本人)が存在している時間のわずかな一瞬を見定めさせてくれる

■ アウレリウスのいう霊的な知の形象（p334, L5-）

- ・ セネカのいうものと対称的
 - 主体は、彼が占める世界の一点から出発し、この世界の内部に没入し、あるいは少なくとも、ごく細部に至るまでこの世界を調べ尽くそうとする
 - 事物のこの上なく微細な肌理にまで目を向けるような近視眼的な視線
- 『自省録』第三巻
 - ・ パラステーマタ:私たちが精神の中に持っていなければならない何か、眼前に保持してかなくてはならないもの
 - 「すでに挙げた数々のパラステーマタに、なお別に一項目が付け加わる」
 - ① 主体にとって善とは何かという定義
 - ② 主体にとって自由とは何かという定義
 - ③ 主体にとって現実とは何か
 - アウレリウスが加えるもう一つの原則は、上記三原則と同じ次元・水準に属するものではない。
 - 善の定義、自由の定義、現実的なものの定義をつねに銘記し、つねに蘇らせなければならぬと同時に、それらをひとつに結合するのに役立つようなもの
- 《私たちが精神に持ち、ひとつに結合すべき諸原理に関する霊的な訓練》とはどのように展開していくのか？

■ 「もう一つの原則」が展開していく第一の契機（p336, l19-）

- ・ 「精神に現れる想念の対象をつねに定義し、記述すること」
 - 「定義する」(ギリシア語):Poieisthai horon
 - ① 境界を引くこと(“horos”=限界づけ、限界、境界)
 - ② 「何かの価値や値打ちを定める」

- 「記述する」(ギリシア語): hupographen poieisthai

事物の形式と諸要素の直観的な内容を多かれ少なかれ細かく見渡すこと

➤ ここでの「霊的な訓練」は、精神に現れるすべてのものに記述と定義を与えること

- 精神に自発的に現れる思考、あるいは知覚やに落ちかかってくるかもしれないものすべて、ひとが送っている人生、さまざまな出会い、目に入ってくるものなど、こうしたすべてのことを機会に与えられるような表象を、与えられるがままの姿をとらえること
- 表象の流れをとらえ、自発的で無意識な流れに対して意志的な注意を向けること
→ 表象の客観的な内容を決定する

■ **知的な方法と霊的な訓練の比較** (p337, l20-): ちょっと脱線? 知的な方法との違いについて言及

霊的な訓練	知的な方法
・ さまざまな表象の流れが自発的に流出するがままにしてやること ・ 表象の自由な運動およびこの自由な運動への働きかけ ・ 表象の流れのほうに分析や注意を向ける	・ 諸表象の連鎖の法則の意志的かつ体系的な定義を自分に課すこと ・ 諸表象の間に、十分に強く、強制的で必然的な結びつきがあるという条件でのみ、さまざまな表象は受け入れられる

※ デカルトの歩みは知的な方法に属する

- ストア派の霊的な訓練から派生し、キリスト教において普通に実践されていた霊的な訓練を標的にしていた

■ **表象の分析という作業** (p338, l12-): より詳細な「もう一つの原則」の説明

➤ 表象の流れに対して、分析や定義や記述の作業を遂行しなければならないという主題

→ 与えられる表象を「転覆」させ、客観的内容を捉えなおそうという作業

- ・ アウレリウスは、想念が精神に現れるような対象を定義し、記述することによって、

◇ その対象を判明に一すなわちその本質において、裸の姿において、全体的に、あらゆる側面から一見ること

◇ 対象の名称や、対象の構成要素であり、対象が分解されるような諸要素の名称を、自分に対して言うこと

が必要だと述べる

⇒ 価値体系全体の再活性化

⇒ 視線と記憶は精神のひとつの運動の中でたがいに結びつく

⇒ 事物の本質が全体的に繰り上げられる

➤ 対象の本質的な実在性の複雑な充実と、時間におけるその存在の脆弱さを把握することができる

- ・ 訓練の第二段階は、対象を、与えられる姿における実在性として考えることではなく、その価値を測ろうとすること

→ 「魂を偉大にしてくれる」: 訓練の目的

- さまざまな束縛や隷属から自由に自己を認知できるような状態になること

- 魂を取り巻き、固定し、限界づけてしまう網目や組織から解放すること
- 心の平静さと神秘的な理性への適合という至高の無関心さを獲得する

■ 魂を偉大にするために必要なこと: エレンケイン (p341, l10-)

- ・ 事物を裸の状態、全体的に、部分において把握する分析的な吟味のために、事物の真価を問うこと (エレンケイン)が必要
 - 疑念や可能な告発、道徳的非難、幻想をはらす知的反駁などの網の目に、対象を通すという機能を持つことが必要
 - 「この対象が、どのようなコスモスにとって、どのような有用性を持つかを調べる」
 - ① この対象は、全体にとって「どのような価値」を持っているのか
 - ② 人間(さまざまな形式の共同体や社会的所属の人間)にとってどのような価値を持っているのか
 - 主体がこの事物との関係でどのような徳を必要としているのかも決定できる(平静心? 勇気? 誠実さ? 良心? 自己統御?)

■ エピクテトス派やキリスト教においてみられる類似の訓練 (p343, l10-)

● エピクテトス@ストア派の場合

- ・ 散歩という訓練
 - ときどき外出して散歩し、自分のまわりを通過するもの(事物、人々、出来事など)を眺める
 - その本質は何なのか、自己にどの程度の作用を及ぼしうるのか、それらに依存しているのかいないのか、それらが私たちに依存しているのかいないのか、対象に即して決定する
 - 表象の内容の吟味のあとに、それに対してとるべき態度を決める
- ・ 記憶の訓練
 - 出来事について想いだし、「出来事は何だったのか」「その本質は何だったのか」「どの程度まで私はそれから自由なのか」「それに対してどのような判断を下し、どのような態度をとるべきなのか」を自分自身に問う

● キリスト教の場合

・ カッシアヌスの粉ひき小屋や両替商の例

- 悪い種が粉挽小屋に入ってくないように、価値のある貨幣を両替できるように、エレンケイン(吟味・価値評価)のようなものが問題になっている
- 表象の流れは必然的に動きを持ち、可変的で、変化する
- この表象に対しては監視の態度、不信の態度をとるべきである

➤ アウレリウスが大きく展開している表象の吟味というストア派的な訓練と、のちのキリスト教の訓練の間にはかなり大きな差異がある

- アウレリウスの表象の吟味は、表象の客観的な内容を調べることではない
 - カッシアヌスが問題にしちえるのは、表象されている対象の本性は何かということではなく、観念としての心像としての表象そのものの純粋さの度合いを知ること

- アウレリウスの場合は、表象それ自体が私に由来するのか、神によって示唆されたのか、悪魔が吹き込んだものなのかなどとは問わない
 - アウレリウスやストア派が問題にしているのはあいかわらず世界の知。
 - カッシアヌスたちの場合は内面性の解釈、主体の主体自身による釈義にほかならない

■ アウレリウスの表象の内容の吟味という一般原理の一連の訓練での適用 (p346, l9-): 実際の実践例

① 対象を時間において分解する訓練

- ・ 舞踏の美しさやメロディが持つ魅惑や追従や快楽を前に、自己を支配するために、瞬間ごとに、音ごとに、運動ごとに分解する:「軽蔑する」とも表現
 - 現在という瞬間に与えられるものだけが、主体にとっては実在的
 - 音は音以上のものではなく、運動や運動以上のものではなく、それ自体では力も魅力もなく誘惑したり追従したりもしない
- 瞬間的な知覚の法則は解放の訓練:現れてくる現実の各要素より、主体を強くしてくれる
- ・ アウレリウスは、連続性の知覚の分析を「人生全体に適用」しなければならないという
 - 私たちのプネウマ(氣息)は息でしかない(呼吸のたびに入れ替わる)
- 私たちが私たちのアイデンティティだと思っているもの、あるいは私たちがそれを適用したり求めたりしなければならないと思いこんでいるものは、私たちの連続性を保証してはくれない
- アイデンティティを基礎づけたりすることができる要素は、徳のみ。
 - 徳は魂の非-散逸で、魂は時間から自由である
 - 要素に分解できず分割できないこの魂の凝集、瞬間を永遠にする魂の凝集においてこそ、私たちはみずからのアイデンティティを見出すことができる

② 対象をその構成要素に分解する訓練 (p349, l13-)

- 私たちが好んで食べる料理は、動物の死体
- 誰もが欲しがらる洋服／ドレスは、羊の毛を貝の血で染めたもの
- 密事は、痙攣とちょっとした液体の分泌をともなった神経の摩擦
- 事物の核心にまで達し、事物全体を貫くことによって、事物が何であるかを見ることができる
- 事物を裸に資、上から眺め、その euteleian(価値の少なさ、安っぽさ)を見下すことができる
- 事物に向ける上から下への視線によって主体の自由を打ち立てる
- ・ 私たち自身への適用
 - 肉は物質的な分析によって、泥と血と水と神経などの構成要素に分解され、息については時間的分析によってその非連続性と恒常的な更新が指摘される
- 残るのは、理性だけ、合理的原理だけであり、そこに私たちはアイデンティティを見出す

③ 縮減的な記述、価値を低下させる縮減という主題 (p350, l20-)

- ・ 価値を低下させるための記述という訓練
 - 目の前に強力で傲慢な男が現れて、自分の力を誇示し、自分の優位を示したり、自分の怒りで恐れさせようとしたら…

- 食事したり寝たり、トイレに行ったり……している姿を考えてみる
- その人が上司にどう接しているかを考えてみる

■ **霊的な知の概念構造** (p351, l9-)

アウレリウス	セネカ
共通点:ある種の上から下への視線	
人間の生存と同じ平面、 <u>私たちが存在している場所を起点とし、事物の核心にまで沈潜する</u>	上から下への視線は <u>世界の頂上から</u> なされる
・ 特異性を持った事物に対して、価値をおとしめるような視線、縮減的でアイロニカルな視点を持つ - 事物の核心を貫通し、最も特異な要素をすべて把握 ⇒事物から私たちを自由にする - 私たちは自分がたがいに区別された一連の諸要素でしかない(私たちは物質的な諸要素、非連続的な諸瞬間でしかない)ことを理解する ⇒私たちが理性的で合理的な原理として自分を把握するならば、私たちは、世界全体を支配する理性であるような何かの一部にすぎないことに気づく(自己を解体してしまう)	・ 私たちの下に世界の総体が展開するのを見る - 主体は世界の頂点に立ち、眼下に世界が展開するのを見ることによって、自分自身を固有な大きさで知覚する(解体はしてしまわない)

- 自己への立ち返りが持つ意味とは (p352, l18-)
 - ・ 世界についての知と対立する形で人間存在や魂や内面性についての知のようなものを構成することではない
 - ・ 事物についての知の様態化 modalisation が問題になっている
- 特徴 1. 主体のある種の運動が問題となる(宇宙の頂点に昇って全体を眺めたり／事物の核心にまで下降したり)
- 主体がしかるべき知を持つためには、自分がいる場所にとどまっていたはならない
- 特徴 2. 主体の移動によって、事物の実在性と価値を同時に把握する可能性が与えられる
- 「価値」とは、世界におけるその位置と関係と固有の大きさのことで、自由な主体としての人間主体に対する関係や重要性や実在的な力のこと
- 特徴 3. 主体は霊的な知において、自分の現実の姿を捉えることができてはならない
- 主体は自分の存在の真理において、自分をみなくてはならない
- 特徴 4. 主体はこの知においてみずからの自由を発見するだけでなく、この自由において幸福と可能な限りの完璧さという存在様式を見出すことによって、この知の効果を確かなものにすることができる
- ・ 上記4つの条件を含む知こそが、霊的な知を構成していたのではないか
 - ・ しだいに限定され、覆い隠され、認識的な知とでも呼びうる別の知の様式によって消し去られてしまった(デカルトやパスカル、スピノザにおける 17 世紀における認識的な知)

■ ファウストという形象 (p354, l9-)

15 世紀末から 16 世紀にかけて、ドイツに実在したという錬金術師ファウストの事跡をもとに形成された民間伝説の主人公。博学で、悪魔との契約で魔力を得、享楽と冒険の遍歴生活を送るが、神に背いた罰で破滅する。(デジタル大辞泉)

ファウスト(表内表記は、F)の歴史をたどると、16-18 世紀の間の認識的な知と霊的な知の関係の問題のあり方を示してくれるかも:霊的な知の権力と魅惑と危険を代表

マーロウのF	呪われ、禁じられた知の英雄:不遇な英雄
レッシングのF (18c 半ば)	Fが代表する霊的な知は人類の進化への信仰へと転換 → 進歩に対する信仰という手段を用いて霊性の知の形象を認識的な知に変化させることでFを救う
ゲーテのF	消え去る霊的な知の世界の英雄に戻る → 世界の頂点に昇り、そのすべての要素を把握し、それを横断し、秘密を理解し、諸要素の中に分け入り、それと同時に主体を変容させて幸福にするような知の形象がみられる - 認識的な知からは、主体は変容するための何かを期待できない - Fが期待する知は、哲学も法律も医学も与えてくれないような、霊的な価値と効果 啓蒙の出現とともに消える霊的な知にたいする郷愁の最後の表明であり、認識的な知の誕生へのもの悲しい挨拶

次回は自己の訓練の問題へ…

■ 感想

どちらかという、セネカは、生きていて捉われがちな些末な問題から個人を解放して、もっと広い世界的な文脈の中で自らを位置づけて、自分の役割や意味へと立ち返らせるような意味あいを持っていたように感じたが、アウレリウスは、自分がとらわれていたり、恐れていたり、不安になっている事物を陳腐化して、ネガティブな感情を持つ要因を整理して、それと向き合うための心構えや意識の持ち方を働きかけるような意味合いがあるような印象を持った。

(エピクテトスの例は、単純に『内省』や『省察』というような意味合いで捉えられたのだが、アウレリウスの例は結構極端にも感じた。魅力を感じながらも、無理やり突き放そう・目を背けようとしているような感じもしたが…。例えば、ブランド品の鞆など、ただの布じゃん?と思えば、関心が向かなくなるとかそういう話であれば理解できる。でも、そんなに簡単に割り切れないしがらみや感情ってあるような気もする。ちなみに、怖そうな人に対して、「でもおうちでは奥さんに尻に敷かれたり、泣いたり、いびきを立てながら寝てるふつうの人なんだろうな」と思い直して、「怖くないじゃん」と捉え直すことは私もよくやる)

日常の生活を営むことと、世界や社会とのかかわり方など理念的なものとを、どのように接合していくことができるのか、も気になった。陳腐で些末なひととき、ひとときによって、生かされてもおり…。事物から解放される、ということが、孤立して孤高に生きていく(文字通り浮世離れした、神的な)ようなことにも読めてしまうような気がして、自分は世俗的なしがらみや物事から、本当の意味で解放を望んでいるかなあ…とも感じてしまった。OTZ